

はじめに

＊このページは試し読み用に作成したものです＊

● はじめに

——自己紹介と問題提起

あなたは動物が好きですか？ と尋ねたら、この本を手にとってくださった皆さんのことから、きっと「好き」と答えてくれるでしょう。しかし、どんな動物をどのように好きかと尋ねたら、いろいろな答えが返ってくるでしょう。時には動物が好きな人同士で意見が対立することもあるでしょうし、動物が好きだからこそモヤモヤしてしまう人も多いはずです。この本は、いろいろなタイプの動物好きの皆さんの参考になればと願って、人間と動物の関係をどう理解すれば良いのか、私たち日本人の歴史と特徴を踏まえて考えます。

ただし、それで悩みが解消するわけではありません。むしろ、動物との関係が生み出す悩みがいかに深く、簡単に解決できないのはなぜかという話になります。「人は本能的に生き物とのつながりを求める」というバイオフィリア仮説を提唱したのはアメリカの生物学者 E.O. ウィルソンですが、実はこれこそが私たちの悩みの根源かもしれません。それは結局、私たちが人間、つまりホモ・サピエンスであるがゆえの悩みだということです。

私自身は動物園の専門家ですが、野生動物を閉鎖空間で飼育展示する動物園は存在自体が悩ましい施設です。動物園は正当化できるのかといった問いが昔から繰り返されてきました。日本では 1951 年に上野動物園長だった古賀忠道さんが「檻^{おり}の中の動物は果たして不幸か？」という対談を行なっていますし、後に上野動物園長になる中川志郎さんは 1977 年に「野生動物たちの自由を奪って、動物園は成立する。その原罪を意識し、そのうしろめたさを正しく捉えるところから出発する」ことを求めています。

私は 2015 年に大学教員になりましたが、前任の石田^{おさむ} 戡さん（次ページ写真左。右は筆者。2015 年撮影）は上野動物園に長く勤務し、多摩動物公園副園長や千葉市動物公園長を務めた人です。石田さんの後任として、私は動物園学などの授業を引き継ぎました。その時、すぐには引き継げなかったのが比較動物観学という授業で、私は石田さんの講義を聴くことから始めました。その中



で石田さんが語ったのが「人間と動物の関係は、矛盾の上に成立している。すっきり割り切れない状態が正常で、どのように矛盾しているか考えることが大切」という言葉です。直観的に「この言い方は面白い」と感じたの

ですが、果たしてこの言葉はどれほど正しいのでしょうか。また、仮にそうであれば私たちはどうしてゆくのが良いのでしょうか。

比較動物観学という授業の特徴の1つは、日本と西洋の動物観をさまざまな分野で比較することです。例えば、ペットのイヌや動物園のキリンについて延命治療か安楽殺かと判断を迫られた時、私たち日本人は西洋人とは異なる判断をする傾向があります。これは一体なぜでしょうか。ここで西洋人を意識せざるをえないのは、彼らがグローバリズム（汎地球主義）を牽引しているからで、これに対して私たちとしては日本人なりの価値観を尊重してほしい場面が出てきます。

この本では、そのような問いに向き合うことで、問題の根っこがどのあたりにあるのか考えたいと思います。人間と動物の関係という大きなテーマの全体像を捉え、モヤモヤの原因だけでもはっきりさせたいのですが、困ったことにこの分野はそれぞれの専門書はあっても、全体像を見渡せる教科書が見当たりません。そこでこの本では少しでも視野を広げるために、わずかな手がかりを使ってクライミング競技のように壁を登ります。これは決して科学的な手法ではなく、地に足のついた議論とも言えません。日本人の特徴のように解釈の幅が広く、仮説に基づいて展開するしかない領域にも踏み込みます。とても広い幅を扱うので、各分野の専門家ならもっと良い表現ができる部分や、別の手がかりを提示できる部分もあるはずです。モヤモヤや矛盾を扱うので、すっきりしない感覚が付きまとうことでしょう。それでも、皆さんなりに考える叩き台になればと願っておりますので、眉に唾をつけながら批判的に読んでいただければ幸いです。

1.4 「動物」とは何か、「人間」とは何か

＊このページは試し読み用に作成したものです＊

道具ですが、野生動物保全も人間の行為ですから、言葉をうまく使うことはより良い行為につながるのです。

この本のテーマは人間と動物の関係ですが、そもそも私たちが世界をいかに理解するかという段階で、このような技術的制約があります。世界には実に多種多様な動物が存在します。それに対して私たち人間は、いろいろな角度から境界線を引いて理解を深めようとしますが、その線引きに収まらない動物は常にいるのです。それでも私たちは線の引き方を工夫したり、線引きに収まらない存在を認めながらも言葉を駆使して理解を深めます。この本でも、言葉を使って動物と私たち自身への理解を深めることで、私たちにできることを模索していきます。

1.4 「動物」とは何か、「人間」とは何か

2013年、ニューヨークでチンパンジーの権利を訴え、研究施設における“監禁状態”からの解放を求める裁判が起こされました。裁判は敗訴に終わりましたが、訴えたグループは今も、チンパンジーは人間と同じ権利を持つと主張しています。それにしてもチンパンジーに権利を認めると、どうなるのでしょうか。例えば、チンパンジーを殺した人間は有罪とします。それでは、人間を殺したチンパンジーは有罪でしょうか。チンパンジーを殺したチンパンジーは有罪なのでしょうか。そもそもチンパンジーは野生でも群れ同士の抗争で殺し合うことがあります。この場合に殺した側を逮捕するのは奇妙な話です。

現実問題として、チンパンジーを殺した人間を有罪とすることはできても、人間を殺したチンパンジーを有罪にするのは無理がありそうです。同じ状況は人間の子どものにもあって、子どもを殺した大人は有罪ですが、大人を殺した子どもを同じように有罪にはできません。子どもに権利を認めたのは大人の側なので、大人には子どもの権利を守る義務がありますが、子どもにはそのような義務はないのです。もちろん、人間の子どもの成長すれば大人（成人）になるので子どもと大人の境界線をどうするかという問題が付きまといますが、これは前節で扱った区切り方の課題です。この違いは「厳密な意味での人格」と「社会的な意味での人格」として説明できます。人間の大人は権利と義務を併せ持つ「厳密な意味での人格」ですが、子どもは「社会的な意味での人格」、

すなわち権利は認めるが義務は課さない存在です。重要なのは、誰を「社会的な意味での人格」と認めるか合意し、そのために努力するのは「厳密な意味での人格」でしかありえないことです。

動物の権利を訴える主張にたびたび見られるのが、かつては白人の男性にしき認められなかった人権が、女性や白人以外に拡張され、さらに子どもにも拡張された歴史を踏まえ、次は動物に拡張すべきという論法です。ただし、女性や白人以外への拡張は「厳密な意味での人格」の拡張なので、義務を負う人も拡張されました。この点で、子どもや動物は「社会的な意味での人格」ですから、権利を認める相手は増えても、努力する義務を負う人は増えません。ここで立ち止まって考えるべきは、人間の大人は一体どこまで頑張れるのかというコストの問題です。例えば、愛玩動物になら拡張できるとしても、野生動物に拡張するのは負担が大きすぎるかもしれません。生命倫理の専門家トリストラム・エンゲルハートが「経済的・心理的に多大の負担を要求するならば、これを正当に拒否」できると述べているように、どの程度の負担なら対応できるかを慎重に検討する必要があります。

皮肉な言い方をすれば、私たちにできるのはチンパンジーの権利を害した人間を処罰することだけで、チンパンジーに私たちの権利を理解してもらうことはできません。結局、「厳密な意味での人格」になれるのは、私たち人間の大人だけなのです。地球上にはこれだけ多種多様な動物がいるのですから、考えようによっては、これは何とも寂しい話です。SFの世界なら多種多様な宇宙人が登場して交流するのに、なぜこの地球上には私たち、つまりホモ・サピエンスしか「厳密な意味での人格」になれる存在がいらないのでしょうか。

そもそも地球上にホモ・サピエンス以外の人類がないのは、決して当たり前の状態ではありません。チンパンジーとの共通祖先から人類が分岐したのは700万年前とされます。400万年ほど前にアウストラロピテクスと呼ばれる初期の人類が出現し、200万年ほど前にアフリカに出現したホモ・エレクトス (*Homo erectus*) は、ユーラシア大陸に分布を広げてジャワ原人、北京原人としても知られます。その後、ヨーロッパからシベリアにかけてネアンデルタール人 (*Homo neanderthalensis*) が、アジアではデニソワ人が出現します。ホモ・サピエンスは30万年以上前に誕生しましたが、アフリカから出て世界中に広がったのは6万年ほど前とされます。ネアンデルタール人の絶滅は2万～

3万年前で、デニソワ人やホモ・サピエンスと一緒に生活することもありました。ホモ・サピエンスのうちアフリカを出た集団にはネアンデルタール人やデニソワ人の遺伝子が混じっており、混血したことは確実です。

ネアンデルタール人が絶滅してホモ・サピエンスが生き残った原因は、多くの学者が議論してきました。体格はネアンデルタール人の方が良かったのですが、ホモ・サピエンスの集団の方が大きかったことは重要でしょう。発声能力もホモ・サピエンスの方が高かったようで、より複雑な言語を使えたことで大きな集団を作り、より良い道具を生み出した可能性もあります。ホモ・サピエンスはイヌを連れていたという説もあります。初期のイヌが狩猟に役立ったかは分かりませんが、ホモ・サピエンスと一緒に育ったイヌは、少なくとも番犬の役割を果たしたでしょう。なお、ホモ・サピエンスがいつからイヌと一緒にいたかは研究が続いており、1万～4万年前くらいの幅があります。

逆に言えば、ネアンデルタール人はイヌを連れておらず、動物を家畜化したのはホモ・サピエンスの特徴だったようです。これがホモ・サピエンスに他の人類とは異なる特性を育んだ可能性があります。ホモ・サピエンスが最初に家畜にした動物がイヌで、私たち人間は親しいイヌと見つめ合うとお互いにオキシトシンが分泌ぶんぴつされます。オキシトシンは愛情ホルモンとも呼ばれ、母親が赤ちゃんを抱きしめた時などに分泌されますが、人間とイヌという異種間の見つめ合いで分泌されるのは相当に特殊なことです。そもそも多くの動物では、見つめ合う行動は敵対的な意志表示になります。これは、ホモ・サピエンスとイヌの共進化によって獲得された特徴（学問的には「形質」と言います）なのです。

イヌは私たち人間と一緒にいることで、祖先であるオオカミとは異なる特徴（形質）を得ました。巻いたしっぽなどの外見や、ワンワンと吠えることはその典型です。人間を頼って目を見る行動もその1つで、自分だけでは取れない場所にエサを置いた時、オオカミは自力で何とかしようと挑戦し続けるのに対し、イヌは簡単あきらに諦めて人間を見つめて援助を求めます。明らかにイヌは人間のいる環境に適応して進化し、結果としてオオカミとは外見も行動も全く異なる動物になりました。それでも交雑できるので、オオカミ（学名 *Canis lupus*）の亜種として、イヌの学名を *Canis lupus familiaris* とすることが一般的です。生物学的種概念に基づけばこうなるのですが、人間のいる環境という独自のニ

ッチに適応したイヌは、生態学的種概念に基づけば別種と言えるので、学名は *Canis familiaris* とすべきと考える人も増えています。

このようにイヌは、オオカミとは全く異なる特徴を得るほどに長い期間、人間と一緒にいました。それと同じ時間、人間もイヌがいる環境で進化してきました。分類学的には10万年前も今もホモ・サピエンスですが、10万年前のホモ・サピエンスと、今の私たちの間には遺伝的にも違いがあります。イヌを始めとする家畜とともに過ごしてきたことはホモ・サピエンスの特徴で、それが本能的に生き物とのつながりを求めるバイオフィリアを強めた可能性があります。ライオンが獲物に共感して悩むことはないでしょうが、チンパンジーも悩まないようなのです。

これがどの程度、他の人類と異なるか検証するのは困難ですが、ここで私たちホモ・サピエンスの特徴を確認しましょう。まず、私たちには大きな集団を作るという特徴があります。この際、私たちは言葉を使って合意形成します。人権はその成果の1つで、お互いに殺害や監禁を罪とすると合意し、それを守る義務を課しています。

しかし、人間は多様ですから相互理解には限界があります。人間の多様性は、多様な環境に進出する上で有利ですが、お互いに違う感覚と背景を持っている以上、合意形成のハードルは上がります。そもそも私たちは自分の肉体を通してしか、世界を認知できません。インターネットを通じて地球の裏で撮影された動画を見られる今でも、その動画を見るには自分の目と耳を使うことが必要です。サイボーグ技術が発達して脳に直接信号を送り込む時代になればともかく、現時点では私たちの知覚は肉体に制約されています。そして、私たちはお互いの心の中をすべて知ることはできません。自分の中にある、他人に覗き込まれない部分を「自我」と呼び、他人の中にある覗き込めない部分を「他我」と呼びます。私たち人間は、お互いに理解しきれない部分を抱えています。

人間は合意形成したがるにもかかわらず、相互理解には限界があるというのでは、どこかに矛盾が生じます。ですから、私たちは相手との合意形成を模索しつつも、お互いのプライバシーに配慮するといった形で“距離の置き方”を大切にする必要があります。

合意形成をしたがることと多様であることは、いずれもホモ・サピエンスの生存を支えてきた特性で、この矛盾を解消できない理由は肉体や脳的能力、そ

して何よりも寿命という時間的制約です。哲学者モーリス・メルロ＝ポンティは人間の身体性に注目し、「とりわけ私たちの感官知覚を正しく評価しなくてはならない」と主張しましたが、人間と動物の関係を考える上でも、この部分をきちんと踏まえることが必要です。

寿命という時間の制約は、私たち人間のあり方を考える上で極めて重要です。日本人の場合、寿命は80年くらいですから、この中でやれることを考えなければなりません。しかし、私たちは一人前と認められて合意形成への参加を許されるまでに18年くらい掛かります。大学を卒業するなら22年、博士号を取得しようと思えば27年は掛かるでしょう。文化の継承には時間が掛かるのです。ですから、文化を継承するための効率、つまりコストパフォーマンスは極めて重要な問題です。

そのような制約の中で、私たち人間はどのように生きていけるのでしょうか。古典的なマズローの欲求5段階説（図1.2）を見ると、一番上にあるのは自己実現欲求です。私たちは自分の能力や可能性を引き出すことで、自分ならではの生きた証を残そうとします。それが幸福感につながることは、心理学的なフロー状態としても理解できます。フロー状態とは、その行動に完全にのめり込み、精神的に活性化された状態です。簡単に言えば、ちょっと背伸びして夢中

で頑張っている状態で、スポーツの世界などでは「ゾーンに入っている」とか「無我の境地」とも表現されます。なお、この状態が幸福なのは人間だけではありません。エサを取り出しにくくするパズルフィーダーが動物福祉を向上させるのは、動物にもフロー状態があるからです。

夢中になって自分の能力を発揮し、自らの生き

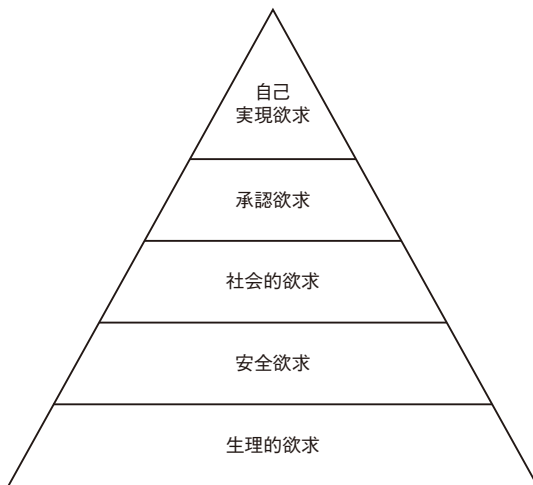


図 1.2 マズローの欲求5段階説。5種類の欲求は、下から順に満たされる。

た証を残す意義は、その時の幸福感だけではありません。発達心理学者エリク・エリクソンは、人間は生涯にわたって発達し続けるというライフサイクル論を整理しました。その最後のテーマは自己統合（統合性）で、「人生の総まとめをしながら、さらに残された人生に関心を向けていく」ことが求められます。私たち人間は、自らの死を意識せざるをえませんか、誰しも少なからず絶望を抱きます。だからこそ、自らの人生を振り返って絶望を上回る肯定感を抱くことが重要です。自らの生きた証を残すことは、自らの死を受容するためにも役立つのです。

続いて、上から2番目にあるのが承認欲求です。他者の承認は、私たちが社会の中で生きる上で必要不可欠です。上述のライフサイクル論では自己同一性すなわちアイデンティティの問題とされ、青年期の発達課題と位置づけられます。エリクソンが特に重視したのは就職という形での他者の承認で、これによってコミュニティの中で生計を立てることが認められ、自己実現に向けた基盤が得られます。

就職というのは、社会的役割を果たすことでお金を得る地位を承認されることですが、お金は人間と動物の関係において本質的なテーマの1つです。お金は、価値に対する人間の意思表示で、払う側も受け取る側も人間でしかありえません。その間にあるのは堅く言えば契約という合意で、それをできるのが人間しかいないからです。これは「厳密な意味での人格」と同じ話なのですが、メルロ＝ポンティは行動を「癒^ゆ合^{ごう}的形態」「可換的形態」「象徴的形態」の3つに区分し、人間以外の動物には象徴的形態がないと説明しました。これは、音楽を楽譜で、言葉を文字で表現するといった「同一主題をさまざまに表現する可能性」のことで、お金という形で価値を表現する能力もこれに当たります。なぜ私たちホモ・サピエンスしか「厳密な意味での人格」になれないのかという先ほどの問いには、行動の象徴的形態を獲得した動物が人間だけだからと答えられます。ですから、私たちがどれほど動物のために頑張っても、動物はお金を払ってくれません。それでは、動物のために頑張るためには何が必要なのでしょう。この点も、第4章で改めて考えます。

私たちは、物品に価値を認めてお金を払うことがありますが、それを受け取るのは必ず人間です。そして、その人もまた、その物品の材料を得るために、他の誰かにお金を払ったでしょう。ダイヤモンドや金銀には高い価値が認めら

れますが、その価値は結局、その物品に積み重ねられた人間の時間に分解できるはずです。そして、そのような人間の時間の蓄積、すなわち先人たちの自己実現の蓄積が都市や文化を形成し、私たちの暮らしを支えています。私たちが豊かな生活を営めるのは先人たちの自己実現の蓄積あればこそです。そして私たちもいずれ先人となっていきます。

このようにして見ると私たち人間というのは、自らの死を前にした時に「生きてきて良かった」と思えることが大切で、そこに向けて自己実現を果たすべく、自らの可能性を発揮しようと夢中で頑張ることに幸福を感じるという、相応に特殊な動物のようです。ゾウやチンパンジー、クジラといった動物に、自らの死の受容という課題がないと断言するつもりはありませんが、楽譜やお金、文字といった象徴的な概念を使いこなせず、私たちと合意形成できないことは間違いありません。ここは、人間と他の動物の決定的な差異として押さえておく必要があります。

1.5 どこまでも理解しきれない動物との関係

「人間と動物の関係は、矛盾の上に成立している。すっきり割り切れない状態が正常で、どのように矛盾しているか考えることが大切」と語った石田は、そう考えた理由を次のように説明します。まず生物は自然の一部を摂取・改変することで存在しています。生物である人間もまた、自然の一部を摂取・改変することで存在しています。しかし人間は、自然の一部である動物を摂取・改変することに躊躇^{ちゆうちよ}を覚えます。ここに矛盾が発生するのです。

もう少し丁寧に解説すると、生物は何らかの形で外界からエネルギーを取り込まなければ死んでしまいます。植物なら太陽光エネルギーを取り込めますが、動物は食べ物という形でエネルギーを取り込まなければ生きていけません。人間は腐葉土や木材も消化できないので、野菜や果物といった植物性の食べ物や、肉や卵といった動物性の食べ物が必要です。野菜や果物を食べる際にはそれほど躊躇しなくて済む私たちですが、動物を食べるために殺すとなれば躊躇を覚えます。日本ベジタリアン協会は、ヴィーガンについて「動物に苦しみを与えることへの嫌悪から、動物の肉と卵・乳製品を食べず、また動物製品を身につけない人たち」と説明します。嫌悪が出発点であると認めているわけです。こ

さらに学びたい人へ

このページは試し読み用に作成したものです

● さらに学びたい人へ

〈Part.1 動物との関係を学ぶ〉

朝日新聞取材チーム（2024）『野生生物は「やさしさ」だけで守れるか？——
命と向きあう現場から』岩波ジュニア新書

読みやすくて分かりやすい文章の中に、記者自身の体験も踏まえて野生動物
を守るために外来種を殺すといった現場の葛藤に丁寧に寄り添った本です。入
門書に最適。

ハロルド・ハーツォグ（2011）『ぼくらはそれでも肉を食う——人と動物の奇
妙な関係』柏書房

人間と動物の関係の矛盾を丁寧にしながら、アメリカのお国柄も感じられる
一石二鳥の学びになる本です。ちょっと厚めですが、読みやすい文章で初心者
にもおすすめです。

真辺将之（2021）『猫が歩いた近現代——化け猫が家族になるまで』吉川弘文
館

イヌやネコに関する書籍を読み漁った中で、圧倒的に良かったのがこの本。
明治維新前後から現代までの日本人とネコの関係をととても丁寧に描いています。
客観的な分析とともに、ネコへの温かい思いが感じられる好著です。

なお、イヌに関してはジョン・ホーマンズ（2014）『犬が私たちをパートナ
ーに選んだわけ——最新の犬研究からわかる、人間の「最良の友」の起源』
（阪急コミュニケーションズ）をおすすめします。

田口洋美（2017）『クマ問題を考える——野生動物生息域拡大期のリテラシー』
ヤマケイ新書